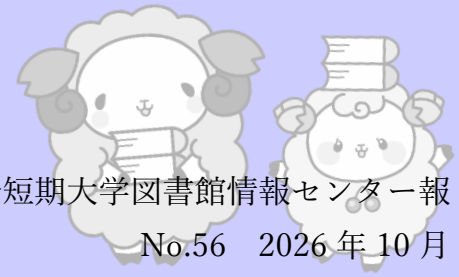
LIBRARY NEWS



桜の聖母短期大学図書館情報センター報
No.56　2026年10月

■冬休み長期貸出(図書)を行います■

対象期間：１２/１０（木）～１２/１９（土）

返 却 日：１/４（月）

■12月・1月は開館日・開館時間に変更があります■

2026年12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2027年1月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

- 8:45～17:00　平日開館
- 8:45～11:00　土曜開館
- 9:00～12:00　クリスマスイブ短縮開館
- 休館日

◆ 急な事情により、臨時休館及び開館時間を変更する場合がございます。
ご来館の際は、事前に当館ホームページをご確認ください。

桜の聖母　図書館

書評大賞　入賞作品をご紹介します。受賞者の皆さん、おめでとうございます！



【書評大賞】

キャリア教養学科２年　寺岡（てらおか）　佳音（かのん）

『一次元の挿し木』　松下龍之介（著）　宝島社

本書の主人公は遺伝人類学を学ぶ大学院生、七瀬悠。ヒマラヤ山中で発掘された 200 年前の人骨をＤＮＡ鑑定にかけると、4 年前に失踪した妹のものと一致した。悠は古人骨の謎を追い始めるが、担当教授の石見崎を始め、古人骨に関わった人々が次々に殺され、研究室の人骨も盗まれてしまう。悠は妹の生死と古人骨のＤＮＡの真相を突き止めようとするが、予想もつかない大きな事件へと巻き込まれていく。

本書の大きな特徴は読者の読む手を止めさせない要素が 2 つある。それは緊張感のある展開と、それを支える伏線回収である。物語の中で謎が深まるだけでなく、登場人物たちが危機に直面するなど、先の展開が気になる場面が次々と描かれる。そのため、「この先はどうなるのか」という緊張感を持ったまま読み進めることになる。そしてその緊張感を高めるものの 1 つに「ちゃぽん」という擬音がある。この擬音は日常生活ではなんてことないものであると思う。しかし、本書ではこのなんてことない擬音が物語を盛り上げるスパイスとなっている。そして話の中、題名、表紙に散りばめられた伏線である。最終章に進むにつれ、バラバラだった伏線がパズルのピースのように合わさっていく感覚だった。このように、ハラハラする展開と華麗な伏線回収によって、先の内容が気になり、自然とページをめくる手が止まらなくなる作品だと感じた。また、話の流れも分かりやすく、普段あまり小説を読まない人でも楽しみながら読むことができると思う。そのため、読書が苦手な人や、これから小説を読み始めたい人にもおすすめしたい。

私が読んでいて興味深いと感じたのは、「人間の同一性とは何か」ということを考えさせられるところである。ＤＮＡは個人を識別するための強力な情報だが、ＤＮＡが一致すれば同じ人間であると考えるのが普通である。しかし、ＤＮＡが同じだからといって、その人の記憶や経験、性格まで同じになるわけではない。「同じ人間」とは、ＤＮＡだけでなく、その人の経験や人間関係も関わってくるのではないかと思う。本書は「同じ人間を作る」という倫理的に意見が分かれる内容について取り扱っている。この内容は現実では実現がほぼできないものである。人間の生命の倫理について今一度、考えさせられる作品であると感じた。

『一次元の挿し木』は古人骨のＤＮＡと妹の生死をめぐる謎を楽しむミステリーであると同時に、人間のクローンや生命のあり方について考えさせられる作品である。緊張感のある展開と巧みな伏線によって、普段小説を読まない人でも読みやすい一冊である。ぜひ読むときは、題名と表紙の絵にも注目して欲しい。

【準大賞】

キャリア教養学科２年　青砥（あおと） 陽菜（はるな）

『こころ』　夏目漱石（著）　文芸春秋

―「しかし君、恋は罪悪ですよ。」―

この言葉を聞いたことがあるだろうか。この言葉は本作の、「上『先生と私』」から抜粋したセリフである。本作は一度は触れたことがあるという方々は多いのではないだろうか。しかし、有名なのは「下『先生と遺書』」であると感じており、前編、中編の内容をよく知らないという方が多いのではないかと考えられる。筆者は、書評を通して本作の後編だけではなく全体を読んで作品を読者に味わってもらいたい。

本作は、明治時代が舞台である。私が先生と出会うところから始まる。先生は大学を出たにもかかわらず、職につかないで奥さんと共に暮らしていた。そのミステリアスな先生の人物像に惹かれた私は、先生の思想や人生を知りたいと先生に伝えた。先生は私にいずれ時が来たら全て伝えると約束した。そして私の父が倒れてしまい、実家へ帰ることになる。実家では何度も先生に手紙を送ったが返事が来ることはなかった。父が危篤となってしまった頃に先生から手紙が来た。その手紙の内容は、先生の遺書だった。私は急いで汽車に乗り、移動時間にその遺書を読み始める。

本作は三部構成になっている。「上　先生と私」、「中　両親と私」で私、先生の人物像、などが書かれており、「下　先生と遺書」に繋がるための伏線が散りばめられている。「下　先生と遺書」は知っている方も多いが全てを読んだ読者は少ないかもしれない。

筆者が考える本作の魅力は人間の弱さ、エゴが繊細な表現で書かれていることである。
本作では人間はいい人であるという性善説ではなく、人間は普段はいい人でもいざというとき悪人になる、という性悪説の考え方が主な考え方である。

この小説は一つでも行動を変えていればこうはならなかったのにという後悔と罪悪感にまみれていると感じた。物語を読んでいるうえで登場人物は皆自分勝手な一面があると感じた。私も先生が嫌がっているのにもかかわらず、過去を知りたがったり、先生も残されたものの気持ちも考えず自殺をしている。そして私の父や母も先生に職業の当てを探してもらうように私に言ったなどが描写されている。物語では自分勝手なことをしてはいけないと登場人物は口で言ってるが実際の行動は自分勝手極まりないと感じ、少し腹立たしく感じた。だが、この自分勝手さが本作の「人は状況によっては善人にも悪人にもなる」という言葉を裏付けるものになっていると考えられる。

本作には人間が誰しも持つ自分勝手さ、弱さ後悔などを繊細に描写している。ぜひ本作を読み返して、先生の人生や自殺に至った理由を自分の考えで解釈してみてほしい。人間が誰しも持つが普段は表面化しない、エゴや弱さに触れることができるだろう。

【準大賞】

キャリア教養学科１年　上田（うえだ） 蓮（れん）

『カラマーゾフの兄弟１』　ドストエフスキー(著)　亀山郁夫(訳)　光文社

この小説に対して一言いうならば「こんな面白い話を人生で初めて聞いた！」である。そう感じた理由はこの本の著者ドストエフスキーには人間の精神をメタファーを使わずリアルに書く才能があるからだ。これほどまでに精神的な会話は他のどこでも聞いたためしがないのである。それゆえ『カラマーゾフの兄弟』の登場人物がどんな人間で何をしたのかという「噂話」が、まるで隣町で起こった話のように聞こえるのだ。実際僕も「やっぱりカラマーゾフだなぁ！」と現に起こっていることのように噂したくなってしまう。よってこの書評がある種の噂話として皆さんと共有する形になることにはご理解いただきたい。またこの小説の読者にはどこを切り取っても面白い噂話をはじめから終わりまで追体験できる特権がある。それゆえこの小説は今から 1 世紀半前にロシアで書かれたのだが、疎遠社会ゆえに「人とはどんな生き物か」を直感で理解することができなくなった現代人を人間の精神の理解へ導く普遍性のある一冊であると言える。

カラマーゾフ一家は父フョードルと長男ミーチャ、次男イワン、末っ子のアリョーシャの 4 人家族で子供たちが父の家に帰ってきたところから物語は始まる。あらすじを述べるならカラマーゾフの「性質」と言われる好色と神聖さの二つから生まれるものが全てだ。カラマーゾフ家の問題としては、父親と既婚者の長男が同じ女性を奪い合っており、次男は兄の妻を愛していることがある。加えて長男と父は相続問題でももめている。このような宿命的なカラマーゾフの宿命を変えるのは末っ子である。彼は家族を一切裁こうとせず、辛抱強く励まし問題を解決へと進める。僕はこの話の最も大事なことは、変えることのできないと言われる人の性質であろうとも劇的に変える存在が思いがけないところから現れるということである。

またここに一読者として『カラマーゾフの兄弟」で人物紹介がされているお気に入りの個所を提示する。カラマーゾフ一家の父の話である。彼は好色で金に対してケチな老人だ。貧しかったころに夢見がちな金持ちのお嬢様と駆け落ち結婚して子供をもうけたが、妻との愛はなく別れた後に死んだという知らせがあると「神よ今こそこのしもべを安らかにさらせてくださいます！」と町に出て言ったという噂や、見るに堪えないくらい子供のように泣いたという噂がありどちらもありそうな話だと言われている。また生まれた子には無関心で下着が汚れているのに放置されているのを見て親戚が「あの子を渡して」というと本当に屋敷の中でどの子のことを言っているのか分からない始末だった。

現代は人間的なかかわりが少なくなってきており、人の精神そのものを実感する機会は少なくなっている。それゆえこの人間の精神について驚くほど鮮やかに書かれた古典小説を読むことで人を知り、人を愛する気持ちが増すであろう。

Library News No.56　桜の聖母短期大学図書館情報センター
https://www.sakuranoseibo.jp/library_information_center/

＊図書館ホームページにて Library News のバックナンバーを公開中です！
　新着図書などもご覧いただけます。

HP も
見てね♪